

2025. 7.13 (日) 使徒23:12～22

23:12 夜が明けると、ユダヤ人たちは徒党を組み、パウロを殺すまでは食べたり飲んだりしない、と呪いをかけて誓った。

23:13 この陰謀を企てた者たちは、四十人以上いた。

23:14 彼らは祭司長たちや長老たちのところに行って、次のように言った。「私たちは、パウロを殺すまでは何も口にしない、と呪いをかけて堅く誓いました。

23:15 そこで、今あなたがたは、パウロのことをもっと詳しく調べるふりをして、彼をあなたがたのところに連れて来るように、最高法院と組んで千人隊長に願い出てください。私たちのほうでは、彼がこの近くに来る前に殺す手はずを整えています。」

23:16 ところが、パウロの姉妹の息子がこの待ち伏せのことを耳にしたので、兵営に来て中に入り、そのことをパウロに知らせた。

23:17 そこで、パウロは百人隊長の一人を呼んで、「この青年を千人隊長のところに連れて行ってください。何か知らせたいことがあるそうです」と言った。

23:18 百人隊長は彼を千人隊長のもとに連れて行き、「囚人パウロが私を呼んで、この青年をあなたがたのところに連れて行くように頼みました。何かあなたに話したいことがあるそうです」と言った。

23:19 すると、千人隊長は青年の手を取り、だれもいないところに連れて行って、「私に知らせたいことは何だ」と尋ねた。

23:20 青年は言った。「ユダヤ人たちは、パウロについてもっと詳しく調べるふりをして、明日パウロを最高法院に連れて来るよう、あなたにお願いすることを申し合わせました。

23:21 どうか、彼らの言うことを信じないでください。彼らのうちの四十人以上の者が、パウロを殺すまでは食べたり飲んだりしないと呪いをかけて誓い、待ち伏せをしています。今、彼らは手はずを整えて、あなたの承諾を待っているのです。」

23:22 そこで千人隊長は、「このことを私に知らせたことは、だれにも言うな」と命じて、その青年を帰した。

<説教>

私たちは、エルサレムに到着して第3回伝道旅行を終えた(21:7)後の使徒パウロの身に起こった出来事について聞き、学んでいます。パウロとイエスの福音に敵対するユダヤ人たちがパウロを殺そうとして町に大混乱を起こしたのでローマ軍の千人隊長率いる部隊が出動してパウロの身を確保し、兵営に連れて行こうとしました。その途中で、パウロを殺してしまえと叫びながら後をついて来たユダヤ人の大群衆に向かってパウロはイエスの証しをしました。しかし彼らはパウロの証しを途中で遮り、「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない。」(22:22)とわめき怒鳴り始め再び大騒ぎとなりました。それで千人隊長は再びパウロを兵営の中に引き入れるよう兵士たちに命じ、また自分でパウロの取り調べをしようとしてしました。そこでパウロがローマ市民権を持っていることが分かり、パウロの取り扱いはより慎重、丁寧になりました。

翌日千人隊長の命令によって集められたユダヤ人の最高法院の中でもパウロは神の前での証しをし、また最高法院議長である大祭司の誤りを指摘し、更に最高法院を構成してい

たパリ人とサドカイ人の不一致を衝（つ）いて議場を大論争に陥れました。この大混乱、機能不全の根本原因は、彼らが主イエス・キリストを信じていなかったからでした。そんな議場でパウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと恐れた千人隊長の命令によってパウロは最高法院の中から引っ張り出され、再び兵営に連れて行かれたのでした。

こうして二日に渡って起こった命の危険を伴う大騒動の中で、主イエス・キリストがその度に千人隊長の手を通してパウロのいのちを守ってくださいました。そして〈その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証ししたように、ローマでも証しをしなければならない」と言われた〉(23:11)のでした。パウロは〈主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟してい〉ました(21:13)。しかし主はパウロがローマでも証しをすることが必要だと言われ、故にパウロがエルサレムで殺されるようにはなさらず、ローマまで連れて行ってくださると約束してくださったのです。それはパウロにとって最高の慰め励ましでした。パウロはエルサレムで主のことを証しをした以上に、ますますいのちを懸けてローマで、またローマに向かう途中で主のことを証ししようと希望をもって決意したことでしょう。

しかしそんな主イエスの御意思（みこころ）とパウロの意思とはますます正反対に悪魔も必死で働きました。パウロがイエスに励まされ慰められたその直後、イエスとパウロに敵対するユダヤ人たちが早速行動を起こしました（12-15）。この陰謀を企てた者たち、ユダヤ人たちとは、おそらく今回の問題の先頭になった〈アジアから来たユダヤ人たち〉(21:27)が中心となった人々でしょうか、四十人以上もいました。パウロを殺すべく手をかけようとするたびに千人隊長の手によってパウロが自分たちから引き離されることにもう我慢がならなかったのでしょうか。「呪いをかけて（堅く）誓う」（12,14）とは、その誓いを破った時には神に呪われてもよいという覚悟で誓うことです。そういう誓いで「パウロを殺すまでは食べたり飲んだりしない、何も口にしない」（12,14）と言うのです。パウロが死ぬか、さもなければ自分たちが餓死するかということです。パウロがいのち懸けなら敵対者たちもまたいのち懸けでした。〈最高法院〉(15)は既に見たように、昨日パウロによって見事に混乱させられ、人々や千人隊長たちの前でもいわば思い切り面目を潰され、恥をかかされていました。〈祭司長たちや長老たち〉(14)もその一員だったはずです。そんなパウロが憎いでしょう、仕返しができるいい手がありますよ、ということでもあったでしょう。パウロはローマ軍の千人隊長の手の中にあり、兵営にいたので、〈最高法院と組んで〉〈パウロのことをもっと詳しく調べるふりをして、彼をあなたがたのところに連れて来るように〉〈千人隊長に願い出〉なければなりません。しかしそれは〈ふりをして〉ということですから、千人隊長を騙すことでした。そして当然パウロは千人隊長の兵士たちによって護送されて来るので、兵士たちに護られている殺すということは、兵士たちとも戦わなければならないはずです。ということは千人隊長に、つまりローマ軍と戦うこと、ローマの法と支配に反逆することです。ならばたとえ目的どおりにパウロを殺すことができたとしても、その最中に自分たちも死ぬことになり、そのときは死ななくても後でローマへの反逆罪で処刑されるに違いありません。その意味でも彼らはいのち懸けでした。パウロ一人を殺すために餓死するか刑死するか、いずれにしてもそんないのち懸けをするとはまさに正気の沙汰ではありません。もはや完全に理性を失っていました。後先を見ない、狂信的企てでした。それは彼らが悪魔に心奪われ、イエス・キリストを拒んで

いたからでした。神を信じていると言いながら、イエス・キリストの父なる神、イエスを死者の中からよみがえらせた神を信じていなかったからでした。理性もイエスの御霊なる聖霊にではなく悪魔に支配されていたからでした。

しかしパウロが信じる主イエス・キリストは、父なる神は、彼ら人間の考えの及ばない不思議な方法でパウロを助け、お守りになりました(16-22)。〈パウロの姉妹の息子〉(16)つまり甥(おい)をお用いになりました。彼がどんな人で、どうしてエルサレムにいて、なによりもどうやって〈この待ち伏せのことを耳にした〉のかは全く分かりません。しかしとにかく〈兵営に来て中に入り、そのことをパウロに知らせ〉ました(16)。昨晚主の慰め励ましを受けたばかりで、感謝と喜びと希望に満ちていたパウロでしたが、今日は失望落胆し、神に文句を言っても不思議ではないような状況でした。しかしパウロは慌てることなく、落ち着いて冷静に考え行動しました。百人隊長を呼んで、甥を千人隊長のところに連れて行くように頼み、甥はおじさんのパウロに対する陰謀を千人隊長に知らせました(17-21)。それを聞いた千人隊長も冷静に自分の職務として何をすべきか考え、また行動しました(22 節以下)。もちろん聖霊が甥(彼がキリスト者だったかどうか不明)、百人隊長、千人隊長のうちに働かれて、彼らをしてパウロを助け護るようになさったのです。そして「ローマでも証しをする」というお約束の一步を早速お始めになったのです。「突然の甥の登場」というのは、パウロ自身も考えていなかったことかもしれません。しかし今回神はそうなさり、パウロもその主のなさり方に従ったのです。彼を通し、百人隊長を通し、と極めて「普通の」「人間的な(いわゆる『奇跡的』ではない、という意味で)」仕方によっても主が最善に導いてくださると信じ、頼り、委ねたのです。

かつてアジアで受けた非常に激しい苦難についてパウロは、「私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています」と既に言っていました(Ⅱコリント 1:8-10)。私たちもこのような正しい意味でのいのち懸けの信仰によって生涯を歩んで行きたいと願い、祈ります。